

製品名: MLH3 ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab13948**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、ラット、マウス
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:20000-1:40000
分子量	164kDa

抗原情報

遺伝子名	MLH3
別名	MLH3; DNA mismatch repair protein Mlh3; MutL protein homolog 3
遺伝子 ID	27030.0
SwissProt ID	Q9UHC1
免疫原	抗血清はヒト MLH3 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 521-570

背景

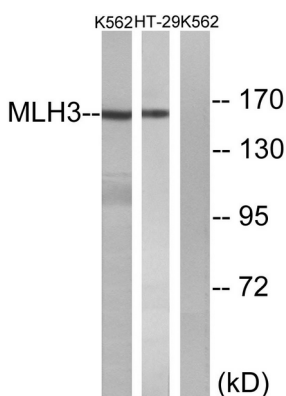
この遺伝子は、DNA ミスマッチ修復 (MMR) 遺伝子の MutL ホモログ (MLH) ファミリーのメンバーです。MLH 遺伝子は、DNA 複製中および減数分裂組換え後のゲノム完全性の維持に関与しています。この遺伝子によってコードされるタンパク質は、他のファ

ミリーメンバーとヘテロ二量体として機能します。この遺伝子の体細胞変異は、マイクロサテライト不安定性を示す腫瘍で頻繁に発生し、生殖細胞系列変異は遺伝性非ポリポーシス大腸癌 7 型 (HNPCC7) と関連付けられています。選択的スプライシングによって生じた転写バリエーションはいくつか同定されていますが、全長が決定されている転写バリエーションは 2 つのみです。 [RefSeq 提供、2008 年 7 月]、疾患: MLH3 の欠陥は、体細胞性大腸癌 (CRC) の原因である [MIM:114500]。、疾患: MLH3 の欠陥は、遺伝性非ポリポーシス大腸癌 7 型 (HNPCC7) の原因である [MIM:604395]。HNPCC 表現型 (リンチ症候群とも呼ばれる) の形成には、複数の遺伝子座位における変異が単独または複合的に関与している可能性がある。臨床的に HNPCC と診断された家系のほとんどは、MLH1 遺伝子または MSH2 遺伝子のいずれかに変異を有する。HNPCC は、癌感受性の顕著な増加に関連する常染色体優性遺伝疾患である。家族性大腸がん (CRC) の早期発症と、消化管、泌尿器、女性生殖器の結腸外がんの素因が特徴です。HNPCC は西洋世界で最も一般的な遺伝性大腸がんの形態であり、すべての結腸がんの 15% を占めると報告されています。HNPCC のがんは、腺腫と呼ばれる良性の腫瘍性ポリープから発生します。臨床的には、HNPCC は 2 つのサブグループに分けられます。タイプ I: 大腸がんの遺伝的素因、発症年齢の若年化、および近位結腸に観察されるがん。タイプ II: 患者は、結腸に加えて、子宮、卵巣、乳房、胃、小腸、皮膚、喉頭などの特定の組織のがんの発生リスクが高くなります。古典的 HNPCC の診断は、アムステルダム基準に基づきます。アムステルダム基準では、大腸がん罹患した親族が 3 人以上おり、そのうち 1 人が他の 2 人の直系親族であること、2 世代以上罹患していること、50 歳未満で発症した大腸がんが 1 件以上あること、遺伝性ポリポーシス症候群が除外されていることが求められます。「HNPCC 疑い」または「不完全 HNPCC」という用語は、アムステルダム基準を満たさない、または部分的にしか満たさない家系において、大腸がんの遺伝的根拠が強く疑われる場合に用いられます。、機能: DNA ミスマッチの修復に関与している可能性が高い。、配列に関する注意: 汚染配列。N 末端部に由来不明の配列がある。、類似性: DNA ミスマッチ修復 mutL/hexB ファミリーに属する。、サブユニット: MLH1 と MLH3 のヘテロダイマー。、組織特異性: 普遍的。、

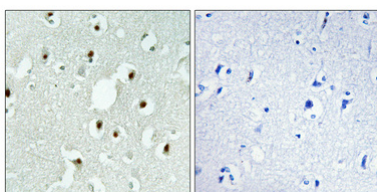
研究分野

ミスマッチ修復

画像データ



MLH3 抗体を用いた K562 細胞および HT-29 細胞のライセートのウェスタンブロット解析。右レーンは合成ペプチドでブロッキングされている。



パラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4°C、一晚) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。